

2023(令和5)年度 総合型選抜

2次選考 基礎学力テスト

地域創生学群 小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は12時30分から13時30分まで(60分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に5ページあり、解答用紙は1枚、下書き用紙は1枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
6. 受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。このような解答があった場合には採点されないことがあります。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子および下書き用紙は持ち帰ってください。

問題 以下の文章の内容を400字以内でわかりやすくまとめよ。

大阪市西成区北部という日本有数の貧困地区で、私は数年間、子ども子育て支援の現場で学んできた。西成区全体で生活保護率が23%、北部に限ればさらに多い割合で困難な環境のなかに暮らす家族が多い。環境ゆえにさまざまな問題が生じているのはたしかであり、子どもについてはヤングケアラーや不登校といった課題が山積している。

ところが、最も懸念されるであろう虐待相談件数は過去10年以上増えてはいない。虐待が心配される家庭について話し合う多職種連携の会議である要保護児童対策地域協議会に出席していると、障害者手帳や療育手帳をもっている子どもや親も多く、貧困と障害という多重の困難を抱えているのが明白なだけにこのことは驚くべきことである。

数年間この地域に出入りしてみると、たしかに貧困は顕著なのだが、遊び場につどう子どもたちは（日本の都市部ではもはや絶滅した）エネルギーをもっている。乱暴であるが物怖じせず笑顔で大人も巻き込んで遊ぶ。そして子ども子育て支援に携わる対人援助職のみなさんは、（業務範囲を超えたボランティアでの働きまでも熱心にされているのだが）幸せな笑顔をみせる。子どもたちのエネルギーと大人たちの明るさにこの地域の大きな魅力があり、それは法律や行政の指導による押しつけの形ではなく、子どもも大人も自らのイニシアチブでコミュニティを作っているということと連動している。

西成北部は、それほど広くはない区域のなかに複数の子どもの居場所が存在する。「かけもち」する子どももいれば、自分の居場所を一つ決めている子どももいる。不登校の子どもたちのために作られた場所もあるが、「こどもの里」のような（0歳から20歳までどの地域の子どもでも、障害を持っていてもいなくても）誰もがつどう居場所もある。

母親が覚醒剤使用で逮捕されたことで、中学生のときにこどもの里に滞在することになったBさんは、初めて訪れたときの印象を次のように語った。Bさんは小学校高学年からずっと不登校で家に引きこもっていた人だ。

Bさん「最初はふさがってたんですけど、だんだん、[小さな]子どもって、そんな関係なしに「遊ぼう」とか、「なんかやろうや」みたいなことを話し掛けてくるじゃないですか。そういう、こっちはふさがってるけど、向こうはがんがんくるもんやから、だんだん慣れてきて、それを受け入れられるようになってきて、子どもとも打ち解けるようになってきて。そうしたら、だんだんスタッフとも打ち解けるようになってきたんですね。[……] [こどもの] 里のスタッフたちはあんまり表も裏もないっていうか、真っすぐ向き合ってくれるから、信用できるようになったですね」

Bさんの言葉からは年齢を超えて誰もが打ち解け、お互いに信頼できるような居場所であることがわかる。

困難な境遇にある子どもが安心できる居場所が大事なのは言うまでもないが、居場所だけでコミュニティが成り立つわけではない。子どもの生きづらさは、家族全体の困難を照らし出す。一人ひとりの顔から家族全体の困難、そして制度や環境の不備を見通す視線が西成にはある。

たとえばBさんの引きこもりも、うつ病と覚醒剤依存を背負っていた母親を心配して外出ができなくなったからという事情がある。そして母親自身は乳児院出身で両親の存在を知らない人だった。とすると、本当は母親へのサポートが必要だったのだろう（Bさんは「[居場所が] そこしかなかったから、[母親は] やくざのほうに行った」と語った。幼少時のBさん母子は別の区に住んでいて地域の支援を受けていなかった）。つまり居場所だけでなくアウトリーチ^{注1)}での支援が必要であり、西成区ではそうしたネットワークも何重か張り巡らされている。

アウトリーチには親へのものだけではなく、不登校の子どもを訪問する教員や地域の支援者も含まれるし、あるいはそもそも支援を受けていないまま隠れている子どもを探すために（ドヤなど）町を歩く「あおぞら保育」（わかくさ保育園）といった営みもある。複数の居場所があり、妊産婦支援からはじまって学童期そしてそれ以降にいたるさまざまな機能を持ったアウトリーチの仕組みがあるので、大きな困難を抱えているとしても、この町に「来たら、だいたいなんとかなる」のだ（西成区のキャッチコピー）。

おそらく、西成で私がかいまみたようなコミュニティが全国で密かに生まれつつあ

るのではないだろうか。有志で集まる自助グループのような小さいものもあれば、地域全体に広がる子ども支援の多職種連携のネットワークのような大きいものもあるだろう。それぞれの状況に応じて作られる形態は異なるだろう。しかしある共通の性格が21世紀に広がってきたコミュニティにはある。

一人ひとりの顔と声から社会を作り直していく試みについて、私が大阪市西成区に通うなかで学んだ要点をとりあげたい。小さな一地域の取り組みから見えたことに過ぎないので部分的な提案に過ぎないが、たたき台としての意味は持つだろう。

当事者はどんな境遇でもなにかのサイン出す力を持っている。このサインは子どもの窃盗や親の虐待、ネグレクトというような「問題」と呼ばれうる形を取るかもしれないし、屈折したコミュニケーションという姿を取ることが少なくないだろう。しかしこれらは逆境から訴えるSOSでもある。あるいは乳児の硬直した体が家族の苦境を表現するような場面もあるだろう。

どの場合も、このような行動を「SOS」としてキャッチできたときに初めてSOSとなる。SOSを出す当事者の力と、SOSをキャッチするケアラーの力の双方が出会ったところで、初めて一人ひとりの声として生きてくるのだ。そして子どもが意見を表明し、意思決定に参加する権利は、まだ守られているとはいえない。つまり小さな社会づくりは弱い立場に置かれた声を聴くところから始まる。

西成区では多層にわたるアウトリーチの網の目が作動している。自ら声を出せない、見えないところに追いやられている人と、顔の見える関係として出会っていく必要がある。わかくさ保育園が路上の子どもを探すあおぞら保育や、労働支援団体が路上生活者の人たちに歩いて根気よく声かけをしていく活動は、まさにすき間を探して出会う活動に相当するだろう。

助産師による家庭訪問から、乳児保育を利用した保育園での生活支援、そこから困難を抱えた家庭への送迎支援や学校教員やソーシャルワーカーの訪問など、重層的にアウトリーチのネットワークを整える。今まで「ネグレクト」や「不登校」とラベリングされていた家庭について、困りごとに焦点をあてて「ヤングケアラー」として発見されるケースがでてきた。それによって子どもが保育園や学校に通えるようになり、親子がともに地域で暮らしていくことができるようになる。つまり保育園などの送迎、不登校児への声かけ、同行支援（通院や手続きなどのサポート）、さらには生活サポ

ートといったさまざまなアウトリーチの活動が入ることで、自宅での家族の生活がなりたつ。生活困窮者支援や高齢者介護でも同じことが言えるだろう。

居宅をもつことは生存の最低限の条件であり、ハウジングが極めて重要な支援であることを、かつて路上生活を強いられた人が多数いた西成は教えてくれる。しかし住む場所だけではまだ生存の条件としても不足している。

人は自分の存在が無条件に肯定される場を必要とする。自分の体が落ち着けるような、そういう場所も必要だ。その場所は、自宅ではなく、他の人がともにいる場所であり、それゆえに自分の存在を肯定してくれる居場所である。居場所は安心できる落ち着ける場所というだけでなく、誰もが利用できて力関係がない場所、遊びの場、何もしなくてよい場、声を発することができる場所、語り合える場、沈黙できる場、いつでも帰ってこれる場所と人、社会で失敗しても戻ってくるができる場所といった多様な意味を帯びる。社会から少しだけ身を引く安心の場であり、かつそこを起点として社会へと関係が広がっていく、そういう場でもある。それゆえに居場所は自宅ではない。

複数の居場所が地域にあれば、どこか自分が落ち着ける場所と出会うことができるだろう。自宅と学校・職場以外にそのような場を持つこと、フラットな関係を築き誰かを頼れる居場所を持つ地域であること、これは自分自身の生存を無条件に肯定する資源である。

重層的なアウトリーチでケアシケアされること、複数の居場所が利用可能であること、このような場が熟成したときに一人ひとりの声が聴き取られる、これが西成に私が見出したものである。

一人ひとりの顔と声から出発して社会を作ること、そのような社会をモデルとして大きな制度を考えること、これは民主主義を本来の姿へと立ち戻らせることなのではないだろうか。多数決や代表制は、すき間に置かれた少数派を捨て去ることもある。本来誰もが生存可能で尊厳を守られ、自分の意思を言葉にして聞き取られる社会が民主制であろう。そのために何が必要なのかのヒントは、西成のように困難が集積した地域にこそあるのではないか。

注1) 積極的に対象者の居る場所に出向いて働きかけること。

(村上靖彦「ケアから社会を組み立てる」『世界』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)